

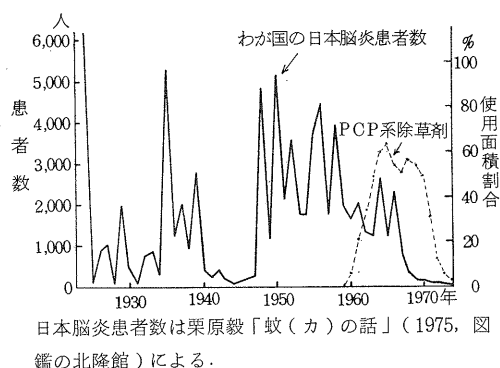
大きな部分を占める技術開発、を緊急に求めている。しかし、他方で技術革新といえる程の大巾な技術開発は、基礎研究、それもより基礎的なもの、から解明するという迂回経路を通らなければ生まれて来ないという段階にきていることも事実である。基礎研究から出てくる成果を広範かつ一日も早く実用化しつつ、基礎研究をさらに深化させて行くことは、限られた研究資源の中では配分の問題になる。どのような資源

配分がよいかは、長期と短期をどう組み合わせるかで一義的に答の出ない問題であるが、幸い近年都道府県の試験場も充実しつつあるし、民間企業のこの分野での研究投資も急速に増大して来ているので、これらと大学や国研をうまく組み合わせて、できるだけ研究資源を大きく動員して、緊急性と迂回性の問題に対処する途を模索して行きたいと考えているところである。

P C P の 功 罪

P C P が水稻除草剤となったのは、1953年に山梨県で日本住血吸虫の中間宿主であるミヤイリガイを殺すために水田で使用され始めたことに端を発している。P C P はウキクサなどの防除に有効であるらしいと注目され、その後、野生ヒエなどの一年生雑草にも有効であることが認められ、1960年から普及が年々伸びた。早くも1964年にはP C P 系除草剤は我が国の水田の6割を超える面積に普及した。しかし1962年に集中豪雨の際に有明海と琵琶湖で魚介類にP C P によると思われる被害が出たため、1970年ころからP C P と低魚毒性除草剤との交替が進み、その数年後には使用されなくなった。

この間に、1967～'69年に主としてコガタアカイエカの吸血によって病原ウイルスが媒介される日本脳炎の発生が激減した。この点に注目した厚生省の調査で浮び上がったのがP C P の水田での大々的な利用であった。なお、前記の1967年はP C P 系除草剤が水田の50%以上に使用されるようになってから5年目に当たる。P C P はカの幼虫のぼうふらの外、ヒル、アメリカザリガニなどの水棲動物に作用が特に強く、



パラチオン剤などの殺虫剤以上に水田や周辺の水路などにいるぼうふら等に対して高い効果を発現したようである。当時、日本脳炎は東南アジアに広く発生していた、死亡率の高い伝染病であった。なお、1986年における我が国の患者数は27人だったと言う。

カによって媒介される伝染病には外にマラリヤ、黄熱、デング熱などがある。中華人民共和国では今でもP C P が住血吸虫などの駆除に大量に使用され、風土病の対策に威力を発揮しているそうである。P C P は、このように環境に対する影響が功罪両面で注目された除草剤であった。

(財)日本植物調節剤研究協会 技術顧問 片岡孝義)